

房総半島における出羽三山信仰の浸透とその要因

—長生地域の民俗事例による一考察—

三 木 一 彦

- I. はじめに
- II. 房総半島における出羽三山信仰
- III. 長生地域の文化的・社会的背景
 - (1) 長生地域の概観
 - (2) 一宮町と玉前神社
- IV. 民俗事例にみる長生地域の出羽三山信仰
 - (1) 一宮町綱田集落
 - (2) 一宮町域
 - (3) 一宮町域外
- V. 結びにかえて

I. はじめに

江戸時代、とりわけ18世紀以降に日本各地の寺社や霊山に対する参詣・登拝・巡礼が広く盛行したことはよく知られている。交通史の立場から寺社参詣の歴史的展開について著した新城は、その要因を、庶民の地位上昇や交通事情の好転、参詣の遊樂化、御師・宿坊の発達、講の発展などに求めており¹⁾、これらの要因が互いに連関しながら、庶民の旅に対する推進力として作用したといえよう。筆者も、先に江戸時代における三峰信仰の展開を検討する中で、江戸時代の民俗宗教に着目することの重要性について述べた²⁾。それは、単に18世紀頃に一つの画期があったという歴史的な意義にとどまらず、それ以降の宗教を考察することが、「現代の日本人の生活、宗教思想の根本をさぐることに」もつながる

からである³⁾。

本稿で取り上げる出羽三山は、山形県のほぼ中央部に位置する月山(標高1,984m)・湯殿山(同1,500m)・羽黒山(同414m)の総称である。出羽三山は古くから熊野三山に比肩する霊山として知られ、『平家物語』・『太平記』といった軍記物語⁴⁾や謡曲⁵⁾・狂言⁶⁾にも登場する。鎌倉時代から室町時代にかけて、羽黒山は熊野・英彦山と並ぶ日本三霊場の一つとして、東日本33カ国の総鎮守と称せられた⁷⁾。江戸時代に入ると、その信仰圏のうち、東北地方を「霞場」、関東地方を「檀那場」とよんで、これらの範囲から多くの登拝者を集めるようになり、出羽三山を取り囲んで「八方七口」とよばれる登山口と御師集落が形成された。この御師集落や信仰圏については、歴史地理学の立場から岩鼻による一連の研究が行なわれており⁸⁾、天台系の羽黒山と真言系の湯殿山が競合しながら、全体としての出羽三山信仰が各地に展開していった。

さて、延享年間(1744~48)の表に基づく取調帳によると、関東地方の羽黒派修験は、武蔵および江戸府内に371、上野・下野・上総・下総・信濃・常陸・安房・相模・遠江の9カ国に1,016あった⁹⁾。このうち江戸には、関東地方の羽黒派修験を統括するために「十老僧」(「江戸十老」・「行人頭」ともよばれる)という役僧がおかれた¹⁰⁾。また、『江戸

キーワード：出羽三山信仰, 房総半島, 長生地域, 講, 年齢階梯制

名所図会』によれば、明和9(1772)年の大火で知られる下目黒町(現、目黒区)の行人坂は、寛永年間(1624~44)に湯殿山行者が大日如来の堂を建立して大円寺と号したことにちなむという¹¹⁾。

現在の千葉県域におおむね相当する房総半島は、関東地方の中でもとりわけ出羽三山信仰が盛んな地域として知られる。例えば岩鼻による三山碑の都道府県別集計では、千葉県は山形県に次ぐ第2位(128基)となっており、その濃密な分布が示されている¹²⁾。関東地方の出羽三山信仰を概観した岡倉も、千葉県におけるその分布範囲の広さと、継続性について指摘し、上総国・安房国では山間部よりも沿岸周辺の低地帯に三山碑の分布が著しいとしている¹³⁾。

かつての千葉県域における出羽三山信仰の一証左としてよく引かれるのが、『江戸名所図会』中にある天道念仏の記述である。すなわち、船橋村(現、船橋市)一帯の寺社境内にて毎年2月に行なわれる行事で、まず堂前に土で壇を築き、本尊の大日如来を取り囲むように諸仏天をあらわす48本の御幣を立て、四隅に梵天と称する高い竹柱を配する。そして、浄衣を着した「話衆」が「三宝諸尊の御号を称へて敬礼し、六根懺悔の文を唱ふ。またその間には弥陀の称号を唱へ、鉦・太鼓を打ち鳴らして、梵天の四方を右繞すること数回、昼夜に間断なし」という様子が、挿絵入りで描写されている。この行事の由来については、「往古弘法大師、出羽国湯殿山をはじめ踏み分けたまひし頃、同国山形の天道村といふ地において、これを開闢したまふを興基として、こは五穀豊穰のための行ひごとなりといひならはせり」と¹⁴⁾、出羽三山信仰との関連を伝えている。

以上のように、その歴史性ならびに持続性において房総半島では出羽三山信仰の浸透が顕著にみられ、その様相や要因の検討・究明は、出羽三山信仰全体を考える意味でも少な

からぬ意義を有するといえる。本稿では、まず房総半島における出羽三山信仰(第II章)と、研究対象地域とする長生地域および千葉県一宮町(第III章)について、それぞれ概観を行なう。続く第IV章では、研究対象地域における出羽三山信仰の現状やそれに関連する歴史を、現地調査や民俗事例に基づいて検討していく。そして、終章において、検討結果をふまえつつ、主として地域社会側の視点から、出羽三山信仰が房総半島に展開・浸透した要因を考察することとしたい。

II. 房総半島における出羽三山信仰

房総半島における出羽三山信仰については、すでに諸先学によって多くの研究や調査報告が行なわれている。本章では、それらの諸研究によりながら、同地の出羽三山信仰について素描していきたい。

そうした研究の初期のものとしては、池上や柳川のものがあげられ¹⁵⁾、両者とも事例集落における出羽三山信仰と年齢層との関係に着目している。すなわち前者では、出羽三山参詣(「奥州参り」)を果たした人を行人とよび、「行人でない老人は、一人前の老人として、この村社会で活躍するには肩身が狭いことになる」とあり、青年層の伊勢参詣や40歳以上の婦人の秩父巡礼と合わせ、寺社参詣と「社会的権威付け」との関連を指摘している。また後者においても、出羽三山信仰が老人へのイニシエーションであり、行人の葬儀への関わりなどから、行人になることは「自分が死ぬときの用意」になると述べられている。

これらの研究をうけ、千葉県各地で綿密な現地調査に基づく報告等が著されるようになる。これには、乾および松田¹⁶⁾・小西¹⁷⁾・岡倉¹⁸⁾・石毛¹⁹⁾・服部²⁰⁾・立野²¹⁾・鈴木²²⁾のものなどがあげられ、出羽三山講によって行なわれる天道念仏や梵天立ての行事に主として焦点があてられている²³⁾。このうち天道念

仏については、前述の『江戸名所図会』をうけ、船橋市一帯の当該行事が記録されている。また梵天立てに関しては、木更津市内の漁村部のものが報告されている。

こうした千葉県下における出羽三山信仰の事例をまとめた宮本によれば、三山講・奥州講・八日講などよばれる県内の出羽三山講では、登拝者が行仲間となる「同行仲間型」（「代参型」と対比される）が一般的形態である。その中でも出羽三山信仰が盛んな地区では、新行人が先輩の組織している講に加わる形をとり、行人による行事の一部が村落全体の重要な行事になっていたりと、講として村落の行事に重要な役割を担ったりしている場合が少なくない²⁴⁾。

また、対馬²⁵⁾は、安房地域を中心に、房総半島各地の出羽三山信仰の諸相を数多く報告している²⁶⁾。このうち出羽三山信仰受容の地域性に関しては、市原市における三山碑の分布図にふれる中で、海岸寄りの平野部周辺への集中と、山間部の稀薄性について指摘しており、その理由を漁村・農村の経済的基盤・生活環境の相違や交通の便、真言宗と日蓮宗の分布などに求めている²⁷⁾。一方、とりわけ湯殿山信仰と関わりがある入定系行人塚については、松崎が安房地域を中心に検討している²⁸⁾。

千葉県各地の自治体史においても、出羽三山信仰はさまざまな形でとりあげられてきた²⁹⁾。平成23(2011)年には、千葉県中央博物館にて「出羽三山と山伏」展が開催され、千葉県各地の出羽三山信仰が広く紹介された³⁰⁾。同展示時には県内33地区の出羽三山講が製作する梵天が収集され、その使用場面が奥州参り・行・葬儀・梵天供養の四つに整理されている。一番目は出羽三山参詣前の精進潔斎（「前行」とよばれる）時、二番目は行人の定期的な信仰集会時（梵天は集落の各所に立てられる）、三番目は行人の葬儀時、四番目は十数年ないし数十年おきに行人集団を中

心に盛大に行なわれる行事（梵天供養）時に、それぞれ作られるもので、梵天は行人の霊の依り代となっていた³¹⁾。

以上のように調査研究が進められる中で、房総半島各地で出羽三山信仰が浸透していったおおよその年代についても把握できるようになってきた。現在のところ、出羽三山信仰に関する千葉県内最古の石造物は寛永7(1630)年の上総国市原郡青柳村（現、市原市）の供養塔とされている³²⁾。また同県下で登拝の最も早い記録は寛永5(1628)年の下総国海上郡岩井村（現、旭市）からのもので、元禄年間(1688～1704)頃より各地からの継続的な参詣がみられるようになる³³⁾。地域的傾向としては、参詣講の組織化は北総地域に始まり、そこから南の西上総地域や北西・北東方向に広まっていったとされる³⁴⁾。こうした中、本稿で取り上げる東上総地域は、出羽三山信仰と競合する日蓮宗卓越地域（いわゆる「七里法華」）の周囲にあつて³⁵⁾、出羽三山信仰が一定程度存在するにもかかわらず³⁶⁾、上記諸研究において取り上げられることは相対的に少なかった。本稿は、この東上総地域の中でも、とりわけ長生地域の出羽三山信仰に焦点をあてることとしたい³⁷⁾。九十九里浜に面する長生地域が、後述するように特徴的な社会構造や生業を擁することも、同地域を対象とする一つの理由である。

Ⅲ. 長生地域の文化的・社会的背景

(1) 長生地域の概観

長生地域は、房総半島の中東部に位置し、九十九里浜の南部にのぞんでいる（図1）。現行（平成27(2015)年8月現在）の市町村では、茂原市と長生郡白子町・一宮町・睦沢町・長南町・長柄町・長生村の1市5町1村が含まれる。長生郡は、明治20(1887)年に長柄郡と上埴生郡（江戸時代には埴生郡）が合併して誕生し、長南町の大半と茂原市の一部が埴生郡であったほかは、長柄郡に属して

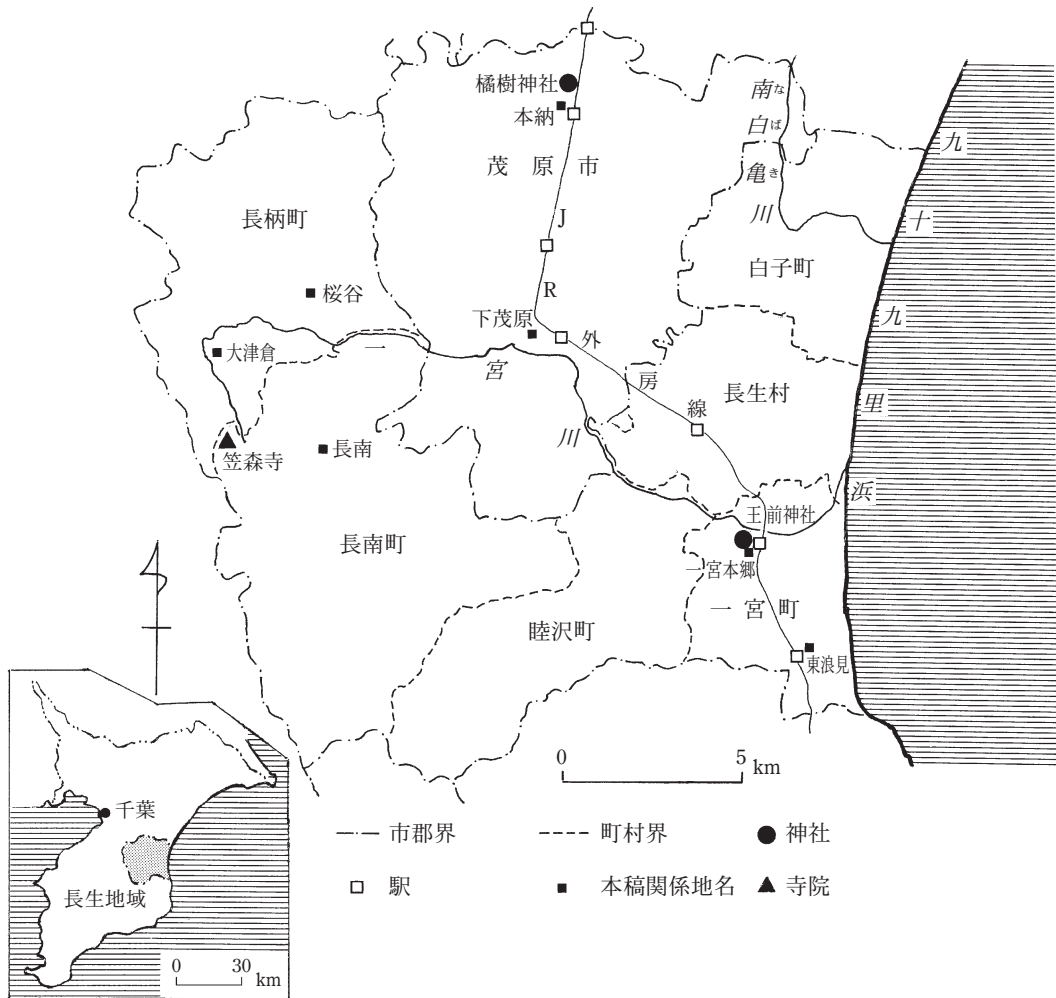


図1 長生地域概要図

20万分の1地勢図「千葉」・「大多喜」(平成23・24(2011・2012)年発行)により作成

いた。

上総国の一宮が長柄郡一宮本郷村(現、一宮町)の玉前神社³⁸⁾、二宮が同郡本納村(現、茂原市)の橘樹神社³⁹⁾とされるなど、長生地域には由緒ある神社が存在し、中世にはそれぞれの神領を基盤とした庄園が成立していた。また、同郡笠森村(現、長南町)に坂東三十三カ所巡礼第31番札所の笠森寺があったほか³⁹⁾、隣接する夷隅郡鴨根村(現、いすみ市)にも同32番札所の清水寺⁴⁰⁾が位置するなど、広域的な信仰を集める寺社が存在する地

域であった。

江戸時代、長生地域をはじめとする上総国の村々は、旗本などの小領主によって支配されることが多く、相給村落も少なくなかった⁴⁰⁾。その中で、文政9(1826)年に加納氏が陣屋を一宮本郷村に移し、幕末まで1.3万石の一宮藩として存続した。諸産業の発達にともない、長生地域とその周辺では定期市網が発達し、同地域内では長柄郡下茂原村(現、茂原市)・一宮本郷村・本納村・埴生郡長南

宿(矢貫村)(現、長南町)に六斎市がおかれた⁴¹⁾。それぞれの市は在郷町の核となり、とくに下茂原村は一帯の中心地として発達した。一方、九十九里浜沿岸では、高度な漁業技術を有する畿内漁民の出漁がみられるようになった。後に干鰯生産の主力となった地引網は弘治元(1555)年に九十九里浜へ伝えられたとされ、江戸時代に入るとより本格的な出漁が開始された⁴²⁾。佐藤信淵の父である佐藤信季^{のぶすえ}は、安永9(1780)年の『漁村維持法』において、「魚を漁^{とる}の業は海鱸^{いわし}を獵^{とる}より大なるはなし、関東九十九里浜にては、年々凡三十万金の鰯を漁し、海浜頗る富饒なり」と記して、九十九里浜の地引網漁業を活写し、「上総国長柄郡東浪見と一の宮の二村は、九十九里浜の南端にて、時々善き寄りの附く所なり」として、地引網が東浪見に7統、一宮に4統あったと記録している⁴³⁾。こうした状況を背景に、時代が下るにつれて、村落部においてもさまざまな生業がみられるようになった⁴⁴⁾。

明治期以降も農漁業をはじめとする諸産業は引き続き営まれたが、明治30(1897)年の房総鉄道(現、JR外房線)開通を端緒に、海水浴場や別荘地としても人気を集めるようになった。また、茂原町では昭和10(1935)年に都市ガス用の天然ガス採掘が開始され、これを利用した工場誘致なども進められて⁴⁵⁾、昭和27(1952)年の市制施行に至った。近年では千葉市や東京都心へ向かう通勤者も居住し、東京大都市圏の外縁部としての機能を担うようになってきている。

(2) 一宮町と玉前神社

一宮町は長生郡の東部、九十九里平野の南端にあたり、その北部を一宮川が東流している(図2)。町域の北西から南東に比高40~50mの崖線が走っており、この崖線の西側には丘陵地とそれを刻む侵食谷、東側には砂質の低平地がみられる⁴⁶⁾。現在の一宮町は昭和

28(1953)年に一宮町と東浪見村が合併して成立した町で、町名の由来でもある上総国一宮の玉前神社とその門前町は、近在の中心地として機能してきた。

農業面では、一宮町は園芸農業の先進地として知られている。町内の綱田集落では、明治期からナシ栽培が導入され、品種を変えながら現在まで栽培が継続されている。また、海岸平野を中心に、第二次大戦後からビニールハウス利用による施設園芸が始められ、後にはガラス温室も取り入れられて、主にトマト・メロン・キュウリが栽培されている⁴⁷⁾。

九十九里浜のうち、一宮川の河口部一帯は、大正年間から昭和戦前期にかけて政財界の要人の別荘が建ち並び、「東の大磯」と称された。戦後は一般の海水浴客が増加し、多数の民宿が開業された。民宿は季節営業のものと同年営業のものに大別され、前者は農閑期の副業的要素を有している。一方、後者は転入者による専門的経営によるもので、最近ではサーフィン客が多くみられるようになっている。

一宮の玉前神社(図2参照)は玉依姫を祭神とし、海岸への奇石を祀ったとの由緒を有している⁴⁸⁾。氏子圏は近隣の旧30数カ村に及ぶとされ、9月に催される例大祭は「十二社祭」と称されている⁴⁹⁾。この祭礼は、睦沢町岩井の鵜羽神社で8日に挙行される御漱祭(宵祭)に始まり、10日の十日祭(お迎え祭)では鵜羽神社の神輿が玉前神社まで渡御し、玉前神社にて両祭神の「御霊合わせ」が行なわれる⁵⁰⁾。その後の直会が終わると、鵜羽神社の神輿は八雲神社へ向かい、そこで釣ヶ崎(後述)を遙拝し、鵜羽神社へと還御する。一方、玉前神社では、祭礼前の神事として、8日に各集落での幟立て、9~13日に神官による海浜での潔斎が行なわれる。12日の御漱祭の後、13日に例大祭が催され、それらの際には、二宮神社(茂原市山崎)や、玉垣神社(睦沢町下之郷)・三宮神社(同町北山田)の



図2 一宮町周辺図

(上記以外の凡例は図1に同じ)

5万分の1地形図「茂原」・「上総大原」(平成20(2008)年発行)により作成

神輿が玉前神社まで渡御する。大祭後、玉前神社の神輿は太東崎北側にある釣ヶ崎の祭典場まで往復する⁵¹⁾。「十二社祭」の呼称は、上記を含めた6社12基の神輿が釣ヶ崎に集まったことに由来するとされるが、現在では

玉前神社・南宮神社(一宮町宮原)の2社4基と、これを迎える綱田(同町)・椎木・中原・和泉・谷上(以上、いすみ市)からの5基⁵²⁾、計9基が集合して御霊合わせを行っている。

これら一連の行事に関しては、さまざまな視点からの検討が加えられており、玉前神社の海との密接な結びつきから、その祭神の性格を海から渡来した同族集団の産土神とする見方もある⁵³⁾。海との関わりという点では、南宮神社の神馬行事も注目され、神馬が釣ヶ崎の祭典場へ行く前に東浪見の浜納屋に立ち寄って、干鰯の売り買い問答を行っている。さらには、全般を通じて「昔の部落を構成する年序階級の活躍が、祭事の上に今日も残っていることは否み得ない」とする松本の指摘⁵⁴⁾を含め、この祭礼と一宮町およびその周辺の地域性との関連は決して小さくはないといえよう⁵⁵⁾。

IV. 民俗事例にみる長生地域の出羽三山信仰

(1) 一宮町綱田集落

前章で述べてきたように、長生地域において、玉前神社、ひいては一宮町は、信仰面での中心核としての役割を担っている。これをふまえ、本節と次節では一宮町域における出羽三山信仰の歴史や現状について検討し、その後で一宮町域外の様相をみていく。

大正2(1913)年に刊行された『長生郡郷土誌』の「三山参詣」の項には、同郡の出羽三山信仰に関して、以下のように記されている。

「出羽三山に参詣するものを、俗に奥州参詣と称し、年々七月下旬より、団隊を結び、三山に参詣し、八月十日前後に帰村するを例とす。一度三山を参拝して、六根清浄を受けし者を行人キヨウコンと称へ、毎月八日行堂に参籠し、盛に神仏の有難きを語り、水垢離をなして、敬意を表し、安全を祈ると共に、同行者の親和を厚ふせり。往時行人といへば、五十歳以上の老翁なりしが、近頃は青年をも混入するに至れり。」⁵⁶⁾

また、時期をさかのぼって、長生郡の南に

隣接する夷隅郡長者町(白井村)(現、いすみ市)(図2参照)の渡辺寛(1770~1855)も、『南総珍』の「行人」の項で、以下のように述べている。

「此山(出羽三山…筆者注)に詣る者は、二度か三度に及ぶ事を願ふ、国に帰り行屋に至、山より伝へし浄火に改、清水に垢離し、懺悔々々六根清浄と、祝言を捧ぐ、何時の頃より歟流行、是も百姓商人の家職にあらず、当時の富士講に似たれど、年久世間流布し、御制禁もなし」⁵⁷⁾

この記述から、すでに19世紀には長生地域一帯で出羽三山信仰が広く定着していたことがうかがえる。

このような長生地域の出羽三山信仰のうち、本節では、一宮町南部に位置する綱田集落⁵⁸⁾に焦点をあて、その後の考察への糸口としたい。綱田集落については、以下に述べるように、それが一つの社会的地域単位として機能する中で出羽三山信仰やそれに関連する諸行事が今も保たれているほか、古文書や民俗調査報告なども活用することが可能である。また、前述のごとく、綱田集落には、一宮町内にありつつ、玉前神社の十二社祭に集落単位で独自に参加するという特性もある。

一宮町綱田集落は、江戸時代には長柄郡綱田村と称して旗本の岡部氏が領し、文政11(1828)年における村高は340石、戸数は55戸であった⁵⁹⁾(図3)。明治22(1889)年に東浪見村と合併してその一部となったが、同集落で民俗調査を実施した宇野は、その後も社会組織などの面において集落としての独自性を保持してきたという⁶⁰⁾。昭和41(1966)年における世帯数は59、人口は323である⁶¹⁾。集落域は、標高約20~40mの丘陵と、それに入りこむ谷津からなっており、その谷頭部に築かれた堰が用水として利用されている。

綱田集落の鎮守は浅間神社であり、現在は

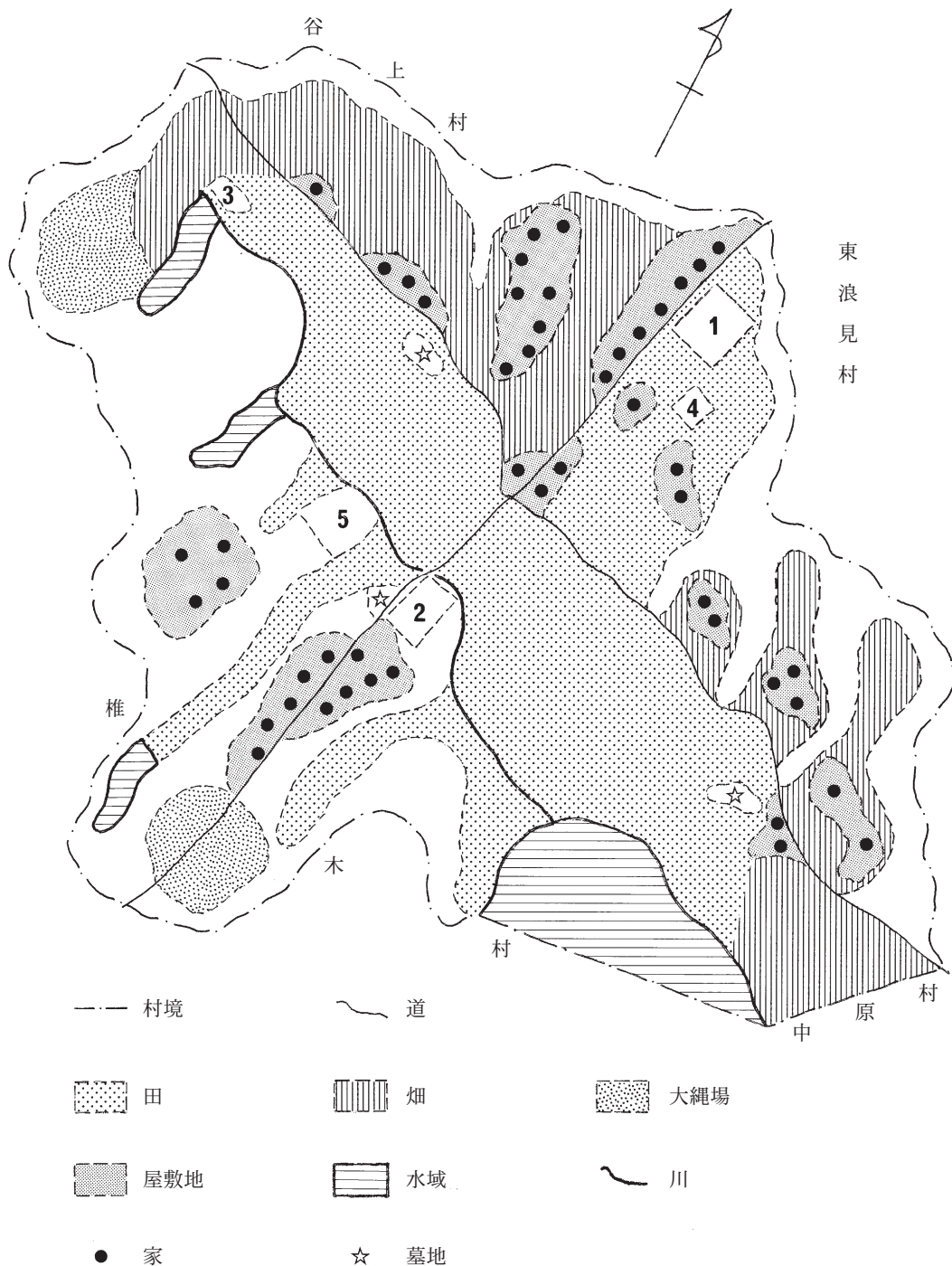


図3 「網田村絵図」—明治4(1871)年—

1 浅間大神 2 長福寺 3 浅間大神上知 4 郷藏敷 5 旧地頭林跡

(もとにした絵図の距離関係が正確でないため、縮尺は示していない。また、村境や土地利用など、現地の実情とそぐわない部分も見受けられるが、原図のままとした。なお、「大縄場」は、新たに開発され、正規の新田検地をうけるまでの間、低率の見込年貢を課される田畑のことである。)

関家文書(千葉県文書館所蔵)、イ44(3)号により作成

7月1日に祭礼が催されている。この祭礼時には、近隣の7歳の子供たち(男女とも)が七五三の参詣にやって来る⁶²⁾。また上記のように、玉前神社の十二社祭の際に綱田集落から1基の神輿を出す、この神輿は南に隣接する椎木の玉前神社の若宮とされている。なお、江戸時代の綱田村には吹上山長福寺という天台宗寺院があったものの、明治維新時に廃寺となり、それ以降は大半の家が中原の玉崎神社に神葬祭の執行を依頼している⁶³⁾。天保6(1835)年の長福寺の年中行事記録によって作成した表1をみると、仏教的な行事とならんで、「浅間祭礼」や「稲荷祭」があり、当時、長福寺が浅間神社の神宮寺的な役割を果たしていたことがうかがえる。また、同じ記録には、浅間社が「船中安全」・「大漁満足」の祈祷札を出していたことや、長福寺が相模大山や津島へ布施の銅銭を納めていたことも記されている⁶⁴⁾。

一宮町教育委員会の調査によると、この浅間神社境内には6基の石造物があり、文化9

(1812)年と同11(1814)年の手水石が1基ずつ、天保6(1835)年の三山碑と大正9(1920)年の富士登山碑が各1基ある⁶⁵⁾。聞き取りによれば、かつて綱田では富士講が盛んであり、出羽三山登拝に参加する年齢層よりも若年で必ず行くものとされていたが、現在では自然消滅したという。一方の出羽三山に関しては、綱田集落センターに昭和48(1973)年と平成8(1996)年に三山登拝した際の記念写真が掲げられている。前者には11名、後者には15名の男性が写っており、年齢層は40歳代を中心として、30~60歳代にわたっている⁶⁶⁾。同集落では、この年代の男性がある程度の人数に達した際に、集団で三山登拝を行なう形となっている。

綱田集落で毎月催される出羽三山関係の行事に八日講がある。これはナシの作業が忙しい4・5月(交配)、8・9月(収穫)を除く毎月8日に集落センターで開かれ、出羽三山登拝の経験を有する行人(平成26(2014)年現在は80代の男性4名)が集まっている。内容は、出羽三山の掛け軸を掲げ、かつての参詣時に身につけた白い行衣を着て、録音(カセットテープ)に合わせて祝詞を唱えるというものである。また1年おきに出羽三山の御師が檀廻に訪れ、同様の行事を行なう(図4)。

表1 綱田村の年中行事
—天保6(1835)年—

月日	行事
1月1日	村中年礼
3日	寺年礼
4日	村廻り
5日	末門中年始
1月中	村祈祷
2月初午	村祈祷・辻切り
5月1日	四節守り
同月中	虫送り
27日	山掃除
6月1日	浅間祭礼
4日	伝教会
7月12~16日	盆行事 (14日に念仏・施餓鬼)
9月18~19日	稲荷祭
10月15日	十夜
11月24日	天台会
12月23日	年神祭

「吹上山年中行司」関家文書(千葉県文書館所蔵)、イ22号により作成



図4 綱田八日講における祈祷

(正面奥で祈祷を行なっているのが、出羽三山御師の神林勝金である。)

平成25(2013)年3月撮影

同集落担当の御師は、羽黒山の神林勝金である。現在、同集落内には、八日講参加者以外にも行人が約25名おり、年始や檀廻の際にはその数を合わせた札が配られている⁶⁷⁾。

八日講が行なう上記以外の行事に、毎年6月28日の虫送りがある。これは第Ⅱ章にて取り上げたような梵天1本と、小さい札つきの竹(30本)を集落にある水田の各所に立てて歩くというものである(図5)⁶⁸⁾。集落センターには昭和33(1958)年の虫送り時の写真があり、これには12名が写っているが、現在は八日講と同じ4名で行なわれている。表1にも5月に「虫送り」とあり、この行事がすでに19世紀から行なわれていたことが分かる。虫送り時の梵天は、10月8日の八日講時に回収され、前述の三山碑の脇に立てられる⁶⁹⁾。このほか、現在では継承されていないが、かつては行屋での寒行も行なわれていた。行屋に祀られていた不動像は、現在は集落センター内に安置され、毎月27日には70歳前後の女性たちによる「不動様」の行事が行



図5 網田八日講による虫送り

(水田の脇に、行衣を着た講員が札をつけた竹をさしているところである。)

平成26(2014)年6月撮影

なわれている⁷⁰⁾。

また千葉県各地でみられるように、網田集落においても、行人の葬儀には一般の人と異なる形式が見受けられる。すなわち、行人の葬儀の際には、死者には出羽三山登拝時の白衣が着せられ、行人専用の念仏が唱えられるほか、行人仲間が白衣で参列し、埋葬時には神主の祝詞の後に行人だけで残って専用の祝詞をあげることになっている。また、虫送り時と同様の梵天が墓の脇に立てられる⁷¹⁾。さらに行人に限らず、葬儀の1~3日後に遺族によって坂東札所の清水寺(図2参照)への参詣がなされることもこの一帯の特徴である⁷²⁾。

(2) 一宮町域

前節をうけて、ここでは網田集落の事例とも対照させつつ、一宮町域における出羽三山信仰の様相について述べる。

網田集落に隣接する東浪見集落大村区(図2参照)に関しては、上智大学による民俗調査報告が昭和43(1968)年に発表されている⁷³⁾。東浪見地区は九十九里浜に面し、かつては地引網漁業が盛んに行なわれていた。旧東浪見村における三山講には、東浪見集落に2つ(通称「南部」および「北部」)、網田集落に1つの計3つがある。このうち大村区は、東浪見集落「南部」の三山講に属し、大村区の北隣の岩切区(同じく「南部」に属する)にある大日堂で三山講(八日講)を行っていたほか、かつてはこの三山講の行人たちで虫送りや雨乞いをしていた。虫送りは梵天を作ったの祈念であり、「行をした人でないとムシがきかない」といわれていた。もう一方の雨乞いは、三山講の講員たちが榛名山から水を受けてくるというものである⁷⁴⁾。実際、この大日堂(現、岩切集会所)には、天保15(1844)年・明治30(1897)年・昭和4(1929)年の3基の三山碑が立てられている⁷⁵⁾。また、大村区における多様な講集団は、それぞ

れの講が世代集団的な性格をもち、さらにこれらの講内部にも年齢による序列があると指摘されている。ただし三山講に関していえば、仮に一家に複数の行人がいたとしても、講に出るのは1軒1人であった⁷⁶⁾。

近年では、旧一宮町に属する原地区(図2参照)にて、筑波大学による地理学的調査が実施されている。その報告によれば、原地区の男性は年齢層の若い順から伊勢講・三山講・富士講に参加することになっている。このうち伊勢講は、玉前神社の十二社祭の運営にたずさわるなど、若衆組や青年団のような性格を帯びているという⁷⁷⁾。一方の女性は、同様の順で子安講・観音講・念仏講に参加する。三山講と念仏講は一宮町で最も盛んな講とされ、とくに三山講は先にみたような行人としての扱いなどの面で、集落社会でも重要視されているという。そして、同地区は、これら年齢階梯に基づく講による社会的関係が本分家関係よりも強く作用する平等性の高い講組農村的な性格を有するとされている⁷⁸⁾。

上記のほか、玉前神社の近隣にある観明寺や東楽寺の境内ないし隣接地でも、大正期から昭和戦前期にかけての三山碑が合わせて7基確認されている⁷⁹⁾。後者の場所には、現在でも三山講の行屋が存在しており、町場においても出羽三山信仰が根づいていたことが看取される。

これらの事例をまとめると、前節で取り上げた網田集落の事例と同様に、三山講は男性老人の集団として、単なる登拝講というにとどまらず、集落社会の中で一定の役割を果たしてきた。その際、三山講を含め、世代ごとに分かれたいくつかの講集団が併存してきたことは、地域の性格を考える上で大きな特徴といえるだろう。

(3) 一宮町域外

一宮町域外の長生地域において、出羽三山信仰と関わる民俗調査が詳しく実施されてい

るのは、管見の限り、長南町と長柄町である。

このうち長南町については、町域東部の芝原集落に関し、隣接する睦沢町森集落と合わせた民俗調査が行なわれている(図2参照)⁸⁰⁾。同調査の報告には、芝原地区に現存し、今でも八日講などの行事が開かれている行堂(図6)や出羽三山登拝について詳しく記録されている。それによれば、この行堂に関係する行人は60~75人ほどおり、毎月八日講を行なうほか、11月7~8日には「行堂の祭り」が催され、花火や踊りなどの余興もある⁸¹⁾。近年では7月下旬~8月上旬に出羽三山に登拝し、帰着後は近隣一帯の行堂や三山碑に札を貼って回る百八社参りを行なう⁸²⁾。登拝および行堂の責任者は1年交替で「先達」とよばれ、さらに年を重ねると出羽三山に申請して「大先達」となる。百八社参り(他の集落では百社参りとよぶこともある)の際に他集落の行堂で茶の接待をうけたり、他の2集落(睦沢町佐貫および長楽寺(図2参照))の行堂と合同で参拝と直会を年3回開いたり⁸³⁾するなど、出羽三山信仰が地域内の交流を生み出している点は注目される。この行堂脇には平成元(1989)年と同11(1999)年の三山碑が



図6 長南町芝原の行堂と三山碑

(中央の三山碑に見える小さな紙片は、「百八社参り」時に近隣集落の講員によって貼られたものである。左に写っているのが梵天である。)

平成24(2012)年8月撮影

立っており、近年に至るまで信仰が継承されていることが分かる。

他方、長南町の北に位置する長柄町に関しては、東洋大学による昭和47(1972)年の民俗調査報告や、篠田の論考がある⁸⁴⁾。前者によれば、同町内44集落のうち、26集落に三山講が存在していた。当時、出羽三山への登拝には1～3週間をかけており、その間、家族は道祖神(道陸神)や地蔵に参詣して道中の無事を祈っていた。行人の葬儀時に、行人だけで「二番葬礼」・「行人ゾウリ」を行なうことは綱田集落と同様である。また後者によれば、羽黒山宿坊の史料に基づく大津倉集落(旧、長柄郡大津倉村)(図1参照)からの参詣の初出は延宝元(1673)年であり、享保年間(1716～36)以降は継続的な登拝が確認できる。また三山碑は町内で41基あり、うち江戸時代が3基(最古は享和元(1801)年)⁸⁵⁾、明治期が15基、大正期が11基、それ以降が12基である。大津倉集落では梵天供養(第二章参照)の史料も残されており、同地区にて幕末から昭和27(1952)年まで5度の梵天供養が営まれて広範囲の行人が参詣に訪れたほか⁸⁶⁾、同地区の行人たちも各地の梵天供養に頻繁に参加していたことが示されている⁸⁷⁾。

このような長生地域における出羽三山信仰の浸透に一定の役割を果たしたのが、出羽三山の末派修験であった桜谷村(現、長柄町)(図1参照)の帝釈寺である。帝釈寺は羽黒山配下の錫杖頭として、江戸の十老僧(第一章参照)と支配下の修験たちとの取次にあっていた。帝釈寺の支配下には、長南宿の行光寺などがあったことが史料より明らかにされている⁸⁸⁾。ただし、帝釈寺や行光寺をはじめとする行人寺が廃寺となっている一方で、出羽三山信仰が今なお息づいていることを考え合わせると、布教側の意図だけではなく、地域社会の側にある浸透の要因を探っていくことが重要となろう。

V. 結びにかえて

ここまで長生地域を中心に、出羽三山信仰のありようを述べてきた。出羽三山信仰は、長生地域において19世紀には定着していたとみられ、現在でも八日講などの行事が続けられている集落がある。八日講参加者、すなわち出羽三山登拝者は、行人として地域社会で重きをなし、集落内の虫送りや雨乞いなどで宗教者的役割を果たすほか、行人の死亡時には独自の葬儀が執り行なわれる。また、百八社参りや梵天供養などにより、出羽三山信仰が地域内の交流を生み出していることも興味深い。本章では、以上のような形で房総半島に同信仰が浸透した要因について、同半島における文化的・社会的基盤と関わらせながら考察し、結びとしたい。

まず信仰の面で歴史をさかのぼってみると、房総半島は、海上の文化伝播により、早くから熊野信仰を受容していた。明治39(1906)年～昭和2(1927)年の各郡誌に基づく乾の集計によれば、千葉県には233社の熊野社が確認でき、長生郡には30社と、安房郡(36社)に次いで多くみられる⁸⁹⁾。これに関して堀は、熊野信仰の海上交通による伝播が高知・宮崎・鹿児島・長崎各県などの西日本沿岸と静岡・千葉両県などの東日本沿岸に顕著であることを指摘している⁹⁰⁾。さらに伊勢信仰についても、千葉県各地で神明神社や伊勢講の存在が報告されており、熊野信仰と同様の海上交通による信仰の伝播が想定されている⁹¹⁾。

堀は、「東北地方では近世、羽黒山伏がしばしばその霞場において、熊野山伏との間に縄張り争いや妨害事件を起した事実」があったことや、熊野比丘尼の活動、語り物や木地譚をともなった熊野信仰の東北地方への流布を指摘している⁹²⁾。事実、昭和27(1952)年の「神社明細帳」による集計では、和歌山県と東北地方に熊野神社の広範な分布がみられ

る⁹³⁾。すでに『義経記』の「判官北国落の事」において、「越後国直江の津（現、上越市…筆者注）は、北陸道の中途にて候へば、それより此方^{こなた}にては、羽黒山伏の熊野へ参り下向するぞと申すべき。それより彼方^{あなた}にては、熊野山伏の羽黒へ参ると申すべき」という台詞があり⁹⁴⁾、第I章で述べたように熊野と出羽三山が古くから修験道の二大勢力として認識されていたことをうかがわせる。

江戸時代以降については、房総半島において数多くの写し霊場が草創された点が注目される。上総国内に限っても18の写し霊場が確認されており、その多くが18～19世紀に創設されている⁹⁵⁾。こうした巡礼や写し霊場に対する信仰と出羽三山信仰との関わりに注目したのが岡倉である。その論考は、千葉県内における三山碑と西国・坂東・秩父の百番札所塔の分布を手がかりとして、両者を兼ねた「三山・百番塔」の存在や出羽三山登拝帰後の百社参り（前節参照）と百観音巡礼との関連を指摘し、出羽三山信仰と観音巡礼との重層性を示唆している⁹⁶⁾。これらの関連性の解明は今後の課題であるが、地域社会の側からみた場合、出羽三山信仰もまた複数の信仰対象の中の一つであるという事実には、つねに注意を払うべきであろう。

房総半島において出羽三山信仰が盛んなもう一つの要因として、同半島でみられる年齢階梯的な社会構造をあげることができる。前章まで述べてきたように、千葉県域の出羽三山講は、地域社会における男性老人の集まりをなしていることが大きな特徴である。

ところで、このような年齢階梯的な社会構造は、一般には西日本の海岸地域で広くみられるとされ、東日本の同族的な社会構造と対比されることが多い⁹⁷⁾。こうした分布状況の中、千葉県域では飛び地的に年齢階梯制が広く分布しており⁹⁸⁾、これと漁撈との関連がかねてから指摘されてきた。例えば平山は、漁村における年齢階梯制の成因を、漁業にとも

なって成立した年齢・性による分業ないし協業や、漁場の共同所有ゆえに漁村の家格が未発達な点に求めている⁹⁹⁾。蒲生も、「年齢階梯制村落」と非定着的・非安定的な農耕もしくは漁撈文化との関連を想定し、それらと夫婦関係を優先する「婚姻家族」や婿入婚・隠居制・末子相続、さらに特定の個人を中心にその縁者を組織化する状況可変的な「親類」組織化との相関を見出している¹⁰⁰⁾。また桜田は、漁村に若者組を主とする年齢階梯制が多くみられる理由について、漁業収益の分配法としての代分け制と、若者組による漁撈訓練指導の二つをあげている¹⁰¹⁾。実際、上智大学による東浪見集落大村区の調査（第IV章第2節参照）でも、漁撈組織に関し、年齢による役割分担や、役割ごとの代分けの細かな区分が記録されている¹⁰²⁾。

そして、蒲生が「生業を基盤とした社会組織のイデオロギーは、遠い昔から日本人の心に拘束的影響を与えながら現代に至っているといえよう」と記したように¹⁰³⁾、年齢階梯制のしくみは、生業と関わる場面にとどまらず、地域社会における広い意味での枠組として機能した。第III章第2節で述べた玉前神社祭礼時の「年序階級の活躍」も、研究対象地域における年齢階梯的社会構造の一つのあらわれととらえられよう¹⁰⁴⁾。

年齢集団についてまとめた関によれば、その年齢区分は大きく子供組・若者組・中老組・老年組の四つに分類される。そして、老年組には宗教的な色彩が濃厚で、その会合を盛大に行なう傾向をみせるのは、「つぎの会合にだれか欠けるもののあることを予想するからだという」¹⁰⁵⁾。この指摘は、房総半島において一般に老年組の組織と認められる出羽三山講がとくに盛行した要因の解釈として、十分に適用可能なものといえよう。葬儀時に霊山の登拝者を別格に扱う方式については、他の地方にも類似した例があり、例えば三重県北牟婁郡須賀利村（現、尾鷲市）では、死

者に供する飯を炊く際、熊野参詣経験者のみ普通の飯でもよく、それ以外の場合は雨だれの落ちるところで飯を炊いたという¹⁰⁶⁾。

以上をまとめると、房総半島は、熊野信仰や年齢階梯制のように、古くより西方からのさまざまな影響を強くうけてきた¹⁰⁷⁾。江戸時代に入って関東地方に出羽三山信仰が伝播した際¹⁰⁸⁾、房総半島では、そのような文化的・社会的基盤と同信仰とが強い親和性を発揮した。つまり出羽三山信仰は熊野信仰の代替的な役割を果たし、年齢階梯的社会の中で死と最も近い距離にある老人の集団に受け入れられていった。ことに、出羽三山信仰が地域社会における男性老人の集団に支えられたことは、現在まで続く信仰の持続性にもつながったと想定される¹⁰⁹⁾。

もとより本稿で述べてきたことは、現時点において、仮説的な展望を多分に含んでいる。さらに調査を重ねる中で、出羽三山信仰の展開や浸透をより精緻に跡づけ、その背景をより有機的に地域社会のあり方と関連づけていくことを次なる目標としたい。

(文教大学)

【付記】

現地調査に際しては、関 信夫氏(千葉県立長生高校)・秀明氏(古今書院)のご兄弟から多大なるご助力を賜りました。また、宇野 幸様(一宮町教育委員会)には、未公刊の修士論文の提供をはじめ、数々の貴重な情報をいただきました。また、綱田集落の皆様や羽黒山宿坊の神林正一氏には、聞き取り調査などで大変お世話になりました。英文要旨の校閲は、文教大学文学部の芦田川祐子先生にお願いしました。以上、記して感謝申し上げます。

【注】

- 1) 新城常三『新稿 社寺参詣の社会経済史的研究』塙書房、1982、699-788頁。
- 2) 三木一彦『三峰信仰の展開と地域的基盤』古今書院、2010、1-13頁。

- 3) 田中圭一『帳箱の中の江戸時代史 下一近世商業・文化史論一』刀水書房、1993、321-322頁。
- 4) 梶原正昭・山下宏明校注『平家物語2』岩波文庫、1999、184頁には、文覚が修行した場所として「那智に千日こもり、大峰三度、葛城二度、高野・粉河・金峰山・白山・立山・富士の嵩・伊豆・箱根・信乃の戸隠・出羽の羽黒、すべて日本国残る所なく、おこなひまはって」とある(文中のふりがなは難読と思われるもののみ残した)。また、山下宏明校注『新潮日本古典集成 太平記4』新潮社、1985、230-243頁には、羽黒山から都に出てきた雲景という山伏が、愛宕山の老僧との問答の内容を熊野の牛王の裏に書きつけて上奏する一節がある。
- 5) 「刀」(芳賀矢一・佐佐木信綱編・校注『校註 謡曲叢書1』臨川書店、1987)、422-433頁。「野守」(同上編・校注『校註 謡曲叢書3』、同上、1987)、81-85頁。
- 6) 「蟹山伏」・「柿山伏」・「禰宜山伏」・「蝸牛」といった山伏狂言の作品に、「出羽の羽黒山より出でたる、駆出の山伏」が登場する。小山弘志校注『日本古典文学大系43 狂言集 下』岩波書店、1961、158-175頁、180-186頁。
- 7) 戸川安章『新版 出羽三山修験道の研究』佼成出版社、1986、333頁。長井政太郎「出羽三山とその宗教集落の盛衰」(戸川安章編『山岳宗教史研究叢書5 出羽三山と東北修験の研究』名著出版、1985)、157-188頁。
- 8) ①岩鼻通明『出羽三山信仰の歴史地理学的研究』名著出版、1992、265頁。②同上『出羽三山の文化と民俗』岩田書院、1996、193頁。③同上『出羽三山信仰の圏構造』岩田書院、2003、250頁。なお、これに先行する研究として以下のものがある。有賀密夫「出羽三山を中心とする山麓信仰集落について」地域研究16、1972、37-42頁。池田義則「羽黒山を中心とした三山信仰の歴史・集落地理」(山形県総合学術調査会編・発行『出羽三山(月山・羽黒山・湯殿山)・葉山総合学術調査報告』、1975)、277-288頁。宇井啓ほか「湯殿山を中心とした三山信仰の歴

- 史地理」(同上書), 289-304頁。
- 9) 「羽黒派末寺并修験院跡大敷取調帳」(年不明)(日本大藏經編纂會編『日本大藏經38』藏經書院, 1919), 431-433頁。なお, この取調帳における羽黒修験の西限は伊勢国であり, おおよそ東日本が出羽三山の信仰圏だったことを裏づけている。
 - 10) 戸川安章『出羽三山—歴史と文化—』郁文堂書店, 1973, 71-72頁。同上書によれば, 十老僧の任命は承応2(1653)年であるが, 寛文年間(1661~73)とする史料もある(「(江戸十老開基)」(神道大系編纂會編・発行『神道大系 神社編32 出羽三山』, 1982), 461-462頁)。
 - 11) 市古夏生・鈴木健一校訂『新訂 江戸名所図会3』ちくま文庫, 1996, 105頁。なお, 『江戸名所図会』の出版は天保7(1836)年である。
 - 12) 前掲8) ③69-73頁。
 - 13) 岡倉捷郎「関東における出羽三山信仰—その分布と三山講の性格・諸相—」まつり38, 1981, 15-48頁。
 - 14) 市古夏生・鈴木健一校訂『新訂 江戸名所図会6』ちくま文庫, 1997, 389-391頁。本文中のふりがなは, 難読と思われるもののみ残した。
 - 15) 池上廣正「出羽三山の信仰—千葉県平山に於ける—」社会と傳承2-3, 1958, 1-6頁。柳川啓一「出羽三山信仰と老年層」人類科学11, 1959, 51-59頁。これに関連して, 柳川啓一「村落における山岳信仰の組織」宗教研究143, 1955, 41-64頁は, 山形県内の出羽三山信仰を中心に上げている。
 - 16) 乾 克己・松田 章「幕張「天道念仏」見聞記」房総文化8, 1966, 59-64頁。松田 章「木更津市中島の「梵天立て」」房総文化9, 1968, 25-29頁。
 - 17) 小西正捷「三山の天道念仏—千葉県船橋市—」季刊どるめん10, 1976, 146-152頁。
 - 18) 岡倉捷郎「上総木更津の出羽三山信仰」あしな159, 1978, 1-31頁。同上「漁村の行事と民俗—上総木更津のボンデン立てを中心—」近畿民俗82, 1980, 30-39頁。同上「湯殿山供養塚と行人墓—君津市三直の行人塚を事例として—」千葉県の歴史23, 1982, 20-28頁。同上「北国道中旅日記」あしな183, 1983, 14-21頁。
 - 19) 石毛才一郎「倉橋部落に伝承せらるる行屋体験記」海上町史研究11, 1979, 53-63頁。
 - 20) 服部重蔵「海上町の出羽三山信仰」海上町史研究14, 1980, 22-32頁。
 - 21) ①立野晃「出羽三山信仰におけるボンデンの諸相」歴史科学と教育0(準備号), 1981, 1-11頁。②同上「[史料紹介] 行屋の史料」歴史科学と教育1, 1982, 35-40頁。③同上「上高根の出羽三山信仰」南総郷土文化研究会誌14, 1983, 9-30頁。④同上「史料としての出羽三山塔」千葉県立上総博物館研究員紀要3, 1984, 30-39頁。
 - 22) 鈴木正崇「天道念仏に関する宗教民俗学的考察」(船橋市教育委員会編『船橋の天道念仏—第3次船橋市民俗芸能調査報告—』船橋市教育委員会, 1990), 169-205頁。ちなみに, 天道念仏と弓行事(オビシヤ)の関連については, 萩原法子「弓行事の原初的意味をさぐる—三本足の鳥の的を中心に—」日本民俗学193, 1993, 42頁に指摘がある。
 - 23) なお, 梵天立ての行事に関しては, すでに大正年間から調査報告がみられる。香取秀眞「梵天供養」郷土研究2-5, 1914, 57-58頁。今井幸則「梵天供養の例」郷土研究4-11, 1917, 56頁。
 - 24) 宮本袈裟雄「関東の出羽三山講—千葉県の三山登拝習俗を中心にして—」(宮田登・宮本袈裟雄編『山岳宗教史研究叢書8 日光山と関東の修験道』名著出版, 1979), 557-573頁。
 - 25) ①対馬郁夫「房総に息づくみちのくの三山信仰」房総史学14, 1974, 30-54頁。②同上「安房の出羽三山信仰に関する考察」館山市文化財保護協会報8, 1975, 47-60頁。③同上「安房国における庶民信仰について—出羽三山信仰・国札観音の巡礼—」房総史学17, 1976, 51-64頁。④同上「出羽三山人の墓制と葬送儀礼」市原地方史研究10, 1980, 31-50頁。⑤同上「安房地方の出羽三山信仰」館山市文化財保護協会報15, 1982, 5-11頁。⑥同上「羽黒修験の先達と

- 安房の檀那場」館山と文化財19, 1986, 65-71頁。⑦同上「出羽三山信仰にまつわる梵天の諸相」千葉県立上総博物館研究員紀要4, 1990, 25-40頁。⑧同上「千葉市南生実の新行人塚の開山供養と梵天大供養について」千葉文華40, 2008, 59-64頁。
- 26) 上記諸研究をまとめたものとして、對馬郁夫『房総に息づく出羽三山信仰の諸相』岩田書院, 2011, 236頁がある。
- 27) 前掲25) ①35頁には、続けて以下のような記述があり、信仰の地域的基盤を考える上で示唆に富む。「多くの漁業集落は、(中略)米作を本位とした農村と比較した時に、製塩・魚貝類・上総海苔などによって漁民生活は潤い、さらに後背農村部よりの米・木炭・材木・竹等が五大力船その他の船運によって、江戸・相模方面に出荷される等雑収入に恵まれていたことが想定される」。
- 28) 松崎憲三「行人塚再考一塚をめぐるフォークロア1一」日本常民文化紀要17, 1994, 43-89頁。なお、これに先立つ論考として、今井善一郎「行人塚考」民俗学研究2, 1951, 131-155頁, 行人塚での市の報告として、近山雅人「千倉・白浜の入定市」あるくみるきく245, 1987, 30-31頁がある。
- 29) 主なものとして、以下の文献があげられる。①篠田惣次「長柄町史研究篇8 長柄町に於ける三山信仰」(長柄町史編纂委員会編『長柄町史』長柄町, 1977), 403-466頁。②市原市教育委員会編『市原市史 中』市原市, 1986, 752-817頁。③財団法人千葉県史料研究財団編『千葉県の歴史 別編 民俗1(総論)』千葉県, 1999, 400-410頁。④同上編『千葉県の歴史 通史編 近世2』同上, 2008, 816-843頁。
- 30) ①「房総の出羽三山信仰」映像記録作成委員会編『映像記録 房総の出羽三山信仰 解説書』千葉県伝統文化再興事業実行委員会, 2011, 52頁。②小林裕美「梵天に見る房総の出羽三山信仰の現在」千葉県立中央博物館研究報告—人文科学—13-1, 2012, 1-81頁。ちなみにこの企画展で展示された梵天については、千葉県立中央博物館によるデジタルミュージアムの形でも画像や説明を閲覧できる。http://www.chiba-muse.or.jp/NATURAL/special/bonten/bonten_index.html (閲覧日平成27(2015)年8月17日)。一方、鶴岡市の出羽三山歴史博物館においても、平成21(2009)年に千葉県内の梵天を集めた企画展が開催された。
- 31) 前掲30) ②7-8頁。この分類は、前掲21) ①1-7頁のものをうけている。
- 32) 前掲26) 118頁, 前掲30) ②5頁。
- 33) 前掲20) 25頁, 前掲29) ④822-823頁。なお、前掲21) ④33頁は、千葉県内における三山碑の願主人数を分析し、少数の篤信者のものであった出羽三山信仰が18世紀中期に「村ぐるみ信仰」へと変化していったことを指摘している。
- 34) 前掲30) ①6頁。全県的な民俗地図としては、千葉県教育委員会編『千葉県民俗地図』同上, 1973, 35頁(その解説は、同上編『千葉県民俗地図 解説書』同上, 1974, 27-28頁), 千葉県教育委員会編「千葉県民俗地図」, 1983, 37頁(天野武監修『日本の民俗分布地図集成4 関東地方の民俗地図2 千葉・東京・神奈川』東洋書林, 1999)がある。
- 35) 前掲30) ②5-6頁による「七里法華」の範囲は、千葉市緑区・東金市・山武郡九十九里町・大網白里市・茂原市(北部)である。また日蓮宗と出羽三山信仰との競合については、前掲29) ③403頁, ④820頁でもふれられている。
- 36) 前掲30) ②11-81頁において紹介されている梵天のうち、東上総地域のは33地区中8例である(茂原市, 長生郡長柄町・長南町・睦沢町・長生村・一宮町, 夷隅郡大多喜町, うち長南町のみ2例)。
- 37) 前掲30) ②6-8頁は、千葉県内の梵天を北総型・内房北部型・内房南部型・外房型の4つに類型化している。このうち、茂原市・睦沢町・長生村・一宮町の例が含まれる外房型では、八日講が頻繁であるのに対して、記念碑の建立に熱心ではなく、梵天の形が比較的簡単であるという特徴がある。他方、内房南部型に含まれる長柄町・長南町も、梵天の形など外房型に通じる特徴が

- みられるとされる。このように、全体として長生地域の出羽三山信仰には一定の共通性を見出すことができよう。
- 38) 橘樹神社については、今井福治郎「橘神社考—橘・橘比売—」(同上『房総の祭』櫻楓社, 1965), 190-208頁に詳しい。
- 39) 笠森寺では、16世紀後期以降の巡礼札が多数確認されている。千葉県企画部県民課編『千葉県史料 金石文篇1』千葉県, 1975, 125-127, 133-135頁。また、笠森寺に題をとった作品として、山東京伝の「笠森娘錦之笈摺」(文化6(1809)年)がある。山東京傳全集編集委員会編『山東京傳全集8』ペリかん社, 2002, 79-130頁。
- 40) 青野壽郎・尾留川正平編『日本地誌8』二宮書店, 1967, 6-8頁。
- 41) 前掲29) ③580-597頁。
- 42) 荒居英次『近世の漁村』吉川弘文館, 1970, 216-240頁。古田悦造『近世魚肥流通の地域的展開』古今書院, 1996, 51-133頁。田島佳也「近世紀州漁法の展開」(葉山禎作編『日本の近世4 生産の技術』中央公論社, 1992), 211-278頁。
- 43) 瀧本誠一編『佐藤信淵家學全集 上』岩波書店, 1925, 449-450頁。引用に際して、旧字体は新字体に改めた(以下の引用でも同様)。なお、「統」は、鰯地引網漁組織の単位である。これをうける形で、佐藤信淵も『経済要録』(文政10(1827)年)の中で、「諸国漁獵の中に於て、其業最も大なる者は、九十九里等の海鰯^{いし}なり、此九十九里の漁獵は、日本総国の第一なるべし」と記している。佐藤信淵著、滝本誠一校訂『経済要録』岩波文庫, 1928, 179頁。ちなみに、九十九里浜におけるイワシ漁業と新田開発の歴史的展開については、菊地利夫『統・新田開発—事例編—』古今書院, 1986, 327-418頁に詳しい。
- 44) 渡辺尚志『百姓の力—訴訟と和解の江戸時代—』柏書房, 2009, 18頁によれば、文政11(1828)年の長柄郡北塚村(現、茂原市)では、村の4割以上にあたる21軒が、屋根屋・酒屋・小間物屋・木挽・紺屋・大工・綿打ちなどを兼業していた。
- 45) 茂原市における天然ガス採掘とそれによる工業化については、前掲40) 243-246頁, 252-255頁, および淡野寧彦ほか「千葉県九十九里地域における天然ガス利用による工業の立地と事業転換」地域研究年報28, 2006, 101-126頁に詳しい。
- 46) 本節の記述には、「角川日本地名大辞典」編集委員会編『角川日本地名大辞典12 千葉県』角川書店, 1984, 1322-1323頁, および財団法人千葉県史料財団編『千葉県の歴史別編 地誌2 地域誌』千葉県, 1999, 778-783頁を参照した。
- 47) 近年、一宮町の農業経営は、花卉栽培の導入など、さらに多様化してきているが、「稲作を主に自給目的に栽培し、農業収入は畑作に依存するという伝統的な農業形態は変化していない」とされる。永井伸昌ほか「千葉県一宮町における施設園芸集落の地域的特色」地域研究年報28, 2006, 167-198頁。
- 48) ①松本信広『日本の神話』日本歴史新書(至文堂), 1956, 5-19頁。②C.アウエハント著、小松和彦ほか訳『鯰絵—民俗の想像力の世界—』岩波文庫, 2013, 313-316頁。なお、玉依姫に関しては、柳田国男による「玉依姫考」が『妹の力』に収められている。柳田国男『柳田国男全集11』ちくま文庫, 1990, 62-91頁。
- 49) 玉前神社の十二社祭については、以下の文献を参照した。①一宮町史編さん委員会編『一宮町史』一宮町, 1964, 353-366頁, 前掲29) ③566-579頁。また、②松田 章「玉前神社年中行事覚書」房総文化10, 17-30頁には、明治36(1903)年の同標題文書が翻刻されている。
- 50) 前掲48) ①8-11頁は、鶺鴒神社の祭神を玉依姫の姥神と考えており、前掲48) ②もこの見方に同意している。
- 51) この際に海岸を男性たちが禪一丁で疾走することから、「裸祭」の異称がある。
- 52) この5基のうち、谷上のものを除く4基は「山之内4社」とよばれ、椎木玉前神社の若宮(綱田)・大宮(椎木)、中原玉崎神社の若宮(中原)・大宮(和泉)となっている

- (綱田については次章で後述)。なお、椎木・中原・和泉の3集落は昭和29(1954)年まで長柄(長生)郡域に含まれていた。
- 53) これに関連して、郷田洋文「上総沿岸のシオフミ」日本民俗学1-2, 1953, 80-84頁は、一宮町から勝浦町(現、勝浦市)までの一帯で、「シオフミ」と称する海岸への神輿渡御が祭礼時に催される事例を報告している。
- 54) 前掲48) ①18頁。続けて、その例として、「若者達が水際を裸かで走る行事が曾つての若人の水辺に於ける集いの遠い根跡を止めていないと断言することは出来ぬ」としている。
- 55) その一例として、十二社祭における「年序階級の活躍」と、長生地域における年齢階梯的社会構造との関連があげられる(第V章に後述)。
- 56) 長生郡教育会編『長生郡郷土誌』侖書房, 1976(初版1913), 153頁。
- 57) 房総叢書刊行会編『房総叢書2』同上, 1914, 866-867頁。
- 58) 本稿では、旧藩政村を便宜的に「集落」とよび、それ以下の単位については引用元の表現に従って「区」・「地区」などと表記する。
- 59) 前掲56) 226頁, 437頁。
- 60) 宇野 幸「地域社会を記録する試みと可能性—千葉県長生郡一宮町における年中行事と地域社会の運営—」千葉大学文学研究科修士論文(未公開), 2002, 24頁。そうした独自性ゆえに、綱田集落の住民や他の地区の一宮町民の中で、綱田は町内でも特別な場所、という意識が強いという。
- 61) 上智大学史学会・史学研究会編『上智大学史学会研究報告2 東上総の社会と文化—千葉県長生郡総合調査—』同上, 1968, 254頁。
- 62) 前掲60) 32頁, 前掲61) 355-356頁。
- 63) 前掲49) ①378頁。
- 64) 「吹上山年中行司」関家文書(千葉県文書館所蔵), イ22号。なお、本文書の原所蔵者である関家は、江戸時代に綱田村の名主を務めていた。
- 65) 一宮町教育委員会編『一宮町の石像物』同上, 32頁。
- 66) 前掲60) 46頁によれば、出羽三山登拝の留守中、妻たちは一宮町とその周辺の道祖神巡りをしていたという。
- 67) 前掲60) 46頁によれば、行人の家では、新年になると、三山参詣時に買った掛け軸や送られてきた札を床の間などに掲げることが多い。
- 68) 前掲60) 41頁によれば、かつてこの時期は草取りの時期だったが、虫送りか鉦(今はない)を叩きながらやって来ると農作業を中断して家に戻っていたという。さらにそれ以前には、この日は虫祈祷とよばれる休日であった。
- 69) 前掲60) 41頁。この行事は「梵天返し」とよばれる。
- 70) 前掲60) 44頁, 47頁, および聞き取り調査による。
- 71) 前掲60) 43頁, 63-64頁, および聞き取り調査による。前掲57) 150頁にも、「又死者にして、若し行人即ち出羽三山参詣者なれば、此日(葬儀の日…筆者注)同行者一団を為して、死者の為め、別に一種の葬式を営むなり」とある。
- 72) 前掲49) ①384頁には、清水寺参詣時に「本堂内の鏡に参詣者の姿を写すと、亡者側から参詣者に最後の対面ができるとも伝えられ、観音の応現によって亡者の来世の安楽を願うという趣旨であったと思われる」とある。
- 73) 前掲61) 250-374頁。
- 74) 前掲61) 328-329頁, 337頁, 357頁。なお、八日講のこれらの行事への関与は、大村区における他の代参講(伊勢講・観音講・日光講)が「いずれも一度参詣したあとは、メンバーだけで定期的に集まって茶飲み話をするだけである」と対照的である。
- 75) 前掲65) 36頁。また岩切区の北東に位置する新熊区の集会所にも、4基(大正元(1912)年・昭和9(1934)年・同10(1935)年, 1基は年不明)の三山碑がある。
- 76) 前掲61) 328-329頁。
- 77) 前掲56) 153頁の「伊勢参宮」の項には、

- 「昔は青年をして、必ず伊勢参宮を為さしめたり。今は奥州参詣の如く、盛ならざれども、猶往々団隊を組み、伊勢太神宮に参拝することあり、然れども出羽三山参詣者の如く、帰村後厳正なる行事を為す者尠し」とある。
- 78) 前掲47) 186-194頁。なお、前掲65) 36頁によれば、原地区内の上ノ原集会所付近に年不明の三山碑1基がある。また中ノ原八日講については、前掲30) ②75-76頁でも取り上げられている。
- 79) 前掲65) 34-35頁。
- 80) 朝比奈時子・久野一郎・宇野幸「民俗調査概報3 睦沢町森地区・長南町芝原地区の年中行事」睦沢町立歴史民俗資料館研究紀要6, 2000, 21-31頁。
- 81) 前掲30) ②68頁によれば、一年でこのときだけ、行堂内にある大日・薬師・観音を祀った厨子を開扉する。
- 82) 前掲29) ①423頁によれば、長柄町域ではこうしたお礼参りを「百社参り」とよんでおり、各地区の稲作状況の検見に好都合だったこともあって盛行したが、稲作の時期が早まるとともに廃れていったという。
- 83) これについては、前掲30) ②68頁。
- 84) 東洋大学民俗研究会編『長柄町の民俗―千葉県長生郡長柄町一』同上, 1972, 182頁, 184-192頁, 前掲29) ①。
- 85) 海保四郎「長柄町の石造文化財について」(長柄町史編纂委員会編『続 長柄町史』長柄町, 1983), 23-41頁によれば、町域内の三山碑は計5基である。また享和元(1801)年の三山碑について刻銘などが紹介されている。
- 86) 前掲29) ①によれば、昭和27(1952)年の大津倉地区における梵天供養時には、昭和16(1941)年～同26(1951)年に出羽三山登拝をすませた計48名の梵天供養のために、近隣の交際村(付き合い村)の手伝いのほか、59地区の行人中の参詣があった。また、松田章「稚津「カラダミ」見聞記」房総文化7, 1965, 41頁によれば、山伏姿の行人が虫送りや雨乞いなどの五穀豊穡を臨機に祈願する行事が、こうした梵天供養(「生き葬式」とよばれる)などに集約されている。この点について、前掲21) ④33頁も、梵天供養が「生きゾウリ」とよばれ、死後に供養を迎えることを忌む観念の存在を指摘している。ちなみに、この大津倉集落の墓制は男女別葬であり、出羽三山信仰の盛なこととの関連が述べられている。長柄町史編纂委員会編『長柄町史』長柄町, 1977, 493頁。
- 87) 前掲29) ①459-461頁によれば、明治24(1891)年～同34(1901)年の間に、大津倉地区の行人たちは、自地区のものを除き、のべ41地区の梵天供養に参加している。
- 88) 前掲29) ①410-413頁。
- 89) 乾克己「房総の熊野神社」房総文化11, 1970, 34-43頁。なお、この論文で、上総国市原郡高滝(現、市原市)の地頭が熊野へ年詣に参じていたという『沙石集』の記事が紹介されている。筑土鈴寛校訂『沙石集上』岩波文庫, 1943, 46頁。ちなみに『沙石集』の成立は弘安2(1279)年～同6(1283)年である。
- 90) 堀一郎『堀一郎著作集8』未来社, 1982, 450-460頁。なお堀は、この「日本宗教史における交通の問題」と題する一文を、「宗教史の側においては、信仰の伝播の事実は、従来かなり漠然としか考えられておらず、ことに陸路の交通による伝播交流のみ力が注がれてきている。しかし他方海に囲まれたわが国では、宗教史の海上交通について、さらに調査と考察を深めねばならぬことに気づかしめられる」と結んでいる。
- 91) 千葉県神社庁「房総の伊勢信仰」企画委員会編『房総の伊勢信仰―第六十二回神宮式年遷宮奉祝―』雄山閣, 2013, 316頁。なお、江戸時代の長生地域における伊勢参宮などの旅日記を翻刻した例として、茂原市立図書館古文書講座編『茂原の古文書史料集4 江戸時代の旅日記』茂原市立図書館, 1998, 234頁がある。
- 92) 前掲90) 458頁。
- 93) 池上廣正ほか「諸宗教の全国分布―統計資料による―」人類科学15, 1963, 41-78頁。本集計によれば、熊野神社の数が多いのは

- 福島県 (269法人)・千葉県 (同239)・山形県 (同126) の順で、県内比が高いのは宮城県 (19.8%)・山形県 (18.1%)・千葉県 (18.0%) の順である。千葉・山形両県が数・割合とも上位であることは、出羽三山信仰の千葉県への浸透を考える上で興味深い。
- 94) 島津久基校訂『義経記』岩波文庫, 1939, 228頁。なお『義経記』の成立は室町初期と推定されている。
- 95) 長谷川匡俊『近世の地方寺院と庶民信仰』岩田書院, 2007, 209-224頁。千葉県域における写し霊場の多さについては、鈴木佐内「房総に於ける八十八ヶ所の考察」房総文化 7, 1965, 43-49頁, および塚田吉雄「千葉県における三十三所・八十八所の概況について」千葉県の歴史35, 1988, 14-24頁もふれている。
- 96) 岡倉捷郎「房総における社寺霊山巡拝塔—出羽三山・百番札所信仰の重層に則して—」房総の石仏 3, 1985, 1-14頁。同上「三山参りと札所巡礼—出羽三山信仰における重層習合の成因—」(真野俊和編『講座日本の巡礼 1 本尊巡礼』雄山閣, 1996), 199-232頁。さらにいえば、熊野信仰もまた、九十九王子といった形で巡礼の性格を内包している。
- 97) それを指摘した初期の論考として、岡正雄「日本民族文化の形成」(大林太良編『岡正雄論文集 異人その他 他十二篇』岩波文庫, 1994), 5-41頁。同上「同族組織と年齢階梯制」(同上書), 147-152頁, がある。なお、細かくいえば、年齢階梯制は、狭義の「年齢階梯制」と、それよりも緩やかな形の「世代階層制」に分類でき、房総半島の事例は後者に近いと判断することができる。住谷一彦『共同体の史的構造論—比較経済社会学的試論—(増補版)』有斐閣, 1985, 335-381頁。
- 98) 泉 靖一ほか「日本文化の地域類型」(大野晋・祖父江孝男編『日本人の原点 2 文化・社会・地域差』至文堂, 1978), 64-92頁。
- 99) 平山和彦「年齢と性の秩序」(坪井洋文編『日本民俗文化大系 8 村と村人—共同体の生活と儀礼—』小学館, 1984), 150-191頁。なお、漁業と年齢階梯制との関連については、赤田や大林による一連の言及がある。赤田光男「同族とムラ組の特質」(同上書), 83-138頁。大林太良「年齢階梯制の背景と機能」(同上書), 139-149頁。同上『東と西 海と山』小学館ライブラリー, 1996, 313頁。同上「社会組織の地域類型」(ヨーゼフ＝クライナー編『地域性からみた日本—多元性理解のために—』新曜社, 1996), 13-37頁。
- 100) 蒲生正男「日本のイエとムラ」(大林太良監修『世界の民族13 東アジア』平凡社, 1979), 23-43頁。この論考は、「生業を基盤とした社会組織のイデオロギーは、遠い昔から日本人の心に拘束的影響を与えながら現代に至っているといえよう」と結ばれている。
- 101) 桜田勝徳『民俗民芸双書25 漁撈の伝統』岩崎美術社, 1968, 126-131頁, 185-195頁。
- 102) 前掲61) 345-348頁。男性は15~16歳からフナカタとなって1代分の分配しよに与るようになり、その後は年齢による役柄の昇進にもなって代も増加する。そして、跡継ぎがフナカタになると、その父親はポテーとよばれて陸上での仕事を担当することになり、ポテーの中から網組の勘定役が推薦されるしくみであった。
- 103) 前掲100) 43頁。
- 104) 本稿でみてきたように、房総半島において出羽三山信仰が盛んな地区が必ずしも漁業にたずさわっているわけではないが、内陸部の集落であっても生活のさまざまな面で沿岸部との交流があったことが想定できる。一例をあげれば、第IV章第2節で取り上げた東浪見地区大村区には、「ヨメは南から」という言葉があり、九十九里地域よりも網田集落やその南の夷隅郡からの婚入が歓迎されていた。その理由は、「南の女はよく働くのに比べ、北の女は贅沢で虚栄心が強いから」というもので、東浪見地区と同じく地引網漁業を行っていた地域との通婚が評価されていなかった点は興味深い。前掲61) 266-270頁。そして、第IV章第2節に示した一宮町原地区のような農村部で

も、年齢階梯制が強く作用していた事例がみられる。

- 105) 関 敬吾「年齢集団」(大間知篤三ほか編『日本民俗学大系3 社会と民俗1』平凡社, 1958), 127-174頁。
- 106) 柳田國男編『海村生活の研究』国書刊行会, 1975 (初版1949), 252頁。
- 107) 第Ⅲ章第1節で取り上げた房総各地への紀州移民は、さまざまな形で故郷の文化を持ち込んだ。その例として、九十九里浜一帯における鯛のくさりずし(なまなれ)や、「クスリユビ」の方言「ベニツケユビ(ベニサシユビ)」の伝播があげられる。日比野光俊「すしの地域性」(石川寛子編『地域と食文化』放送大学教材, 1999) 151頁, および佐藤亮一監修『お国ことばを知る方言の地図帳』小学館, 2002, 80-81頁, 335頁。
- 108) 筆者は、かつて千葉県銚子市を調査した際、その一帯が江戸時代の間「黒潮文化

圏」から「利根川文化圏」および「親潮文化圏」への指向を強めることを指摘した。ことに東廻り海運による東北地方との交流は、房総半島における出羽三山信仰の浸透にも少なからず影響を与えたであろう。三木一彦「下総国海上郡高神村における紀州移民の動向」(石井英也編『景観形成の歴史地理学—関東縁辺の地域特性—』二宮書店, 2008), 204頁。

- 109) 前掲30) ②9頁にある長南町蔵持の出羽三山講員の言葉は、房総半島の地域社会における同信仰のあり方を端的に物語っている。「講は半分信仰で半分親睦。女房のいないところで酒が飲める場所で、神仏を考えるのは時々。ただ、村の重鎮の集まりでもあって、ここで重要なことが決まったりする。ちゃんとした家の世帯主しか入れない、和を乱すような人は入れない暗黙のルールがある」。

Permeation of the Cult of Dewa-Sanzan and Its Factors in the Boso Peninsula:
A Case Study of the Folk Religion in the Chosei Region

MIKI Kazuhiko

The examination of the folk religion in Japan is very important in considering the daily life and mentality of the Japanese. This study takes up the cult of Dewa-Sanzan, sacred three mountains in Dewa Province (currently Yamagata Prefecture). The cult spread in the Tohoku and Kanto districts and was believed enthusiastically until recent years especially in the Boso peninsula (nowadays in Chiba Prefecture). In this peninsula, there are many religious groups (*ko*) to worship Dewa-Sanzan. Most of the groups consist of aged men, and often have a certain status in the local communities.

The Chosei region is situated in the mid-eastern part of the Boso peninsula. It has some historic shrines and temples, and has grown economically from the Edo era, notably in fishery. In Ichinomiya town in this region, there is the supreme shrine (*Ichinomiya*) of Kazusa Province, and the fete of this shrine is an important event in the surrounding areas.

Many inhabitants in the Chosei region have belonged to the religious groups and pilgrimaged to Dewa-Sanzan. They have worshipped regularly the deity of Dewa-Sanzan in their own village or town, and have built many stone monuments of the cult. These religious groups have also played some roles in such local events as the prevention of pest and the praying for rain. When a member of the group died, the other members attended his funeral and held special rites for him.

This paper points out two factors in the permeation of the cult of Dewa-Sanzan in the Boso peninsula. Firstly, the cult of Kumano (Kumano-Sanzan in Kii Province, presently in Wakayama Prefecture) had previously diffused to the Boso peninsula through marine traffic, and the cult of Dewa-Sanzan replaced it in the Edo era. Secondly, this peninsula has possessed a social structure divided by age which is characteristic in fishing villages of southwestern Japan. This social structure has suited to the religious groups of Dewa-Sanzan as an age group in the local communities.

Key words: Cult of Dewa-Sanzan, Boso Peninsula, Chosei Region, Religious group (*ko*),
Age Divided System